

長い距離を移動した人—2 源義経

八柳 修之

NHK 大河ドラマ・鎌倉殿をご覧になっていますか。2005 年にも宮尾登美子原作の TV ドラマがありました。義経役はタッキーこと滝沢秀明(出世して現在はジャニーズ事務所副社長になっている)。弁慶役、マツケンこと松平健、すでにマツケンサンバは人気があった。おかげで、藤沢宿の義経首洗い井戸、白旗神社を訪れる観光客でお金は落ちないが賑わいを見せた。今回はどうであろうか。



平治元年(1159)源義経は父源義朝、母常盤御前、京都で生まれた、牛若丸の誕生である。以後、文治5年(1189)4月奥州平泉衣川での藤原泰衡との合戦で自刀し、わずか31歳で生涯を終えた。この間、平泉、鎌倉、京都、さらに西は壇の浦(下関)へと移動、その距離はどのくらいになるであろうか。

ここで源義経の平泉で自刀する以前の足取りを見て見よう。交通手段は自ら歩くか、馬に乗るしかなかった時代、何キロ位移動したか興味のあるところである。

そのような調査があるか検索してみたが調べてみた限りなかった。

試算してみたい。義経の誕生から衣川の戦いで敗れて自刀するまでの間、その行動範囲は奥州平泉から下関、壇之浦まで日本を縦横に駆けめぐった。

(資料は、「源義経夢の跡、探求地図」(監修大矢邦宣(平泉郷土館館長)企画・発行 文化地層研究会(盛岡))

この結果、最後の逃避行のルートが判然としないが、少なくとも31歳の生涯、軍旅だけでも約4,000 kmある。ルートが判然としない逃避行を合わせると5,000 kmは移動している。最後の逃避行は殆ど徒歩である。

(距離の算出は「Japan AB・日本」の距離によっているの、実際の義経の移動距離とは合わないが目安とお考えいただきたい)



略歴

1159年 平治元年 1歳、父、源義朝、母、常盤御前の九男、京都で牛若丸誕生する。平治の乱で源義朝敗北、家臣の裏切りで死亡。

1160年 平治2年 2歳、常盤は三人の子を伴って都を脱出するも捕らえられる。子供の命と引き換えに平清盛

の妾となる。

1169年 仁安4年 11歳、牛若丸、鞍馬寺に預けられる。

1173年 承安3年 15歳、牛若丸、受戒を拒否して「遮那王」と名乗る。

1174年 承安4年 16歳、金売吉次と出会い、共に奥州平泉を目指す。途中、賊に襲われるが返り討ちする。
元服し「源九郎義経」と名乗る。平泉に着き、藤原秀衡の庇護を受ける。【京都(鞍馬)→平泉:648 km】

1175年 安元元年 17歳、お忍びで京に上がる。鬼一法眼を訪ね兵法書「六〇三略」を求めるが断られる。
しかし、娘と通じ入手し修得する。

1176年 安元2年 18歳、このころ弁慶に出会う? 【平泉→京都→平泉:1,296 km】

1180年 治承4年 22歳、義経、兄源頼朝の挙兵を知り奥州出発。黄瀬川で対面する、

1881年 養和元年 23歳、7月、義経、鶴岡八幡宮の上棟式で大工に馬を引く。

1184年 元暦元年 26歳、1月・宇治川の合戦。木曾義仲を滅ぼす。 【平泉→黄瀬川→鎌倉:498 km】

2月・一の谷の戦い、奇襲『鴨越の逆落とし』で平家軍を屋島へ追う。

【鎌倉→京都→一の谷→京都:345 km】

1185年 元暦2年 27歳、義経、検非使左衛門少尉に任ぜられる。この頃、静を妾とする。

2月、屋島の合戦、3月、壇の浦の合戦。奇襲「八そう飛び」で平家軍を滅ぼす。

【京都→屋島→壇の浦:458 km】

5月、平宗盛父子を鎌倉へ送るが腰越で足止めされる。頼朝の重臣・大江広元宛の「腰越状」で心情を訴える。6月、宗盛らを連れて京に戻る。途中で処刑する。

【壇の浦→京都→腰越→京都:1,148 km】

11月、義経追討の院宣が下される。海路で西国を目指すが難破、吉野へ逃れ静と別れる。

1186年 文治2年 28歳、3月、静が鎌倉へ出頭、義経の行方を尋問される。7月静が生んだ男児を頼朝は由ガ浜にて棄死させる。静は鎌倉を後にするが、その後の消息は不明。

1187年 文治3年 29歳 義経一行、山伏姿で奥羽へ下る。「愛発の関」で留められるが、弁慶の機転で潜り抜ける。義経一行、「安宅の関」で問答。亀割山で北の方が義経の子を出産。平泉着。藤原秀衡の元に身を寄せる。10月・秀衡死去。 【京都→畿内→吉野山→京都→平泉:不明】

1188年 文治4年 30歳 義経追討の院宣が秀衡の息子・藤原泰衡に発せられる。

1189年 文治5年 31歳 閏4月、衣川の合戦。泰衡の急襲で義経は妻子を殺して自刀。

6月・義経の首実検が腰越の浜で行われる。7月・頼朝が奥州へ出兵し、藤原泰衡を討ち奥州藤原氏は滅亡する。 【その後、平泉→津軽→北海道→大陸?】

以上から、衣川で自刀するまで、31歳の生涯で少なくとも**5,000 km**以上は移動している。

義経は衣川の戦いで敗れ自刀したことになる。しかし、自刀したのは義経の影武者杉目太郎行信であり、義経は弁慶等と密に平泉を脱出し北上山地を超え釜石、宮古へ、久慈、八戸と三陸沿岸を北上し青森を経て津軽半島の先端三厩から北海道に渡り、さらに樺太、大陸に渡りチンギスハンとなったという北行伝説がある。

とすれば、当時としては長い距離を移動した人に挙げられる。

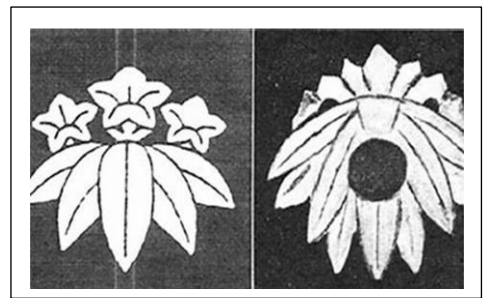
義経=チンギスハン説を始めて知ったのは高一のとき、宮古高校から転任してきた国語の教師からであった。先生は関西の人で京大出であったにも関わらず、義経生存説に関心を持ち、調査研究のため片田舎の宮古に赴任、その後、盛岡へ。2年後、東京の女子大へ転任して行った。この話を再び私を興奮させたのは昭和33年(1958)、出版された高木彬光著「成吉思汗の謎」(光文社) 作者は青森県津軽の出身。推理小説になっており一気に読めて面白かった。ベストセラーにもなった。いまでも宮古から北海道へ渡ったとされる津軽半島先端三厩まで歩くツ

アーもあるようだ。

義経生存説は自刀し、その首は酒に浸して、死後 43 日もかかって鎌倉の腰越に運ばれた、という話がベースとなっている。当時、平泉から鎌倉までは 2 週間もあれば着くことが出来た。旧暦の 5 月 6 月と言えば真夏、腐敗は進む。首実検した梶原景時は義経ではないとした。頼朝も確認せず海に捨てられたという。

義経北行伝説を最初に記したのは林羅山の「本朝通鑑」(1670) である。新井白石、徳川光圀が支持した。義経ジンギスハン説を唱え世界に紹介したのはシーボルトである。義経とジンギスハンが同じ時代に生きたこと、ともに小男、白い軍旗、紋が類似していること、モンゴル族の出身でなかったこと、ウイグル文字があまり読めなかったが漢字は読めたことなどを挙げている。

また、1809 年、樺太を経て大陸に渡った間宮林蔵の探検の目的の一つに義経伝説の真偽を探ることもあった。間宮はアムール川流域で現地の人々に尋ねたところ、「漢土の天子 (中国の皇帝のこと) は日本人の末裔と聞いている」と誰もが答えたという。



北行伝説のルートは、前掲「源義経夢の跡探求地図」によれば、平泉衣川、北上山地、遠野、釜石、宮古、久慈、八戸、青森、三厩 (竜飛岬) である。ここまでの距離を Japan AB によって計算すると、平泉～釜石 75 km。釜石～宮古～八戸～青森間 197 km、青森～三厩 40 km。計少なくとも 312 km である。Japan AB によるキロ数は現在の国道等をベースとしたものであり、当時のデコボコ道、曲がりくねった山坂を考慮すればこんなものではなかった。

津軽海峡を舟で渡り、以後、福島、乙部、江差、松前・・・となっており、この辺りのどこから大陸へ渡ったのではないかと、としている。諸説あり稚内に義経試し切りの岩があることから宗谷岬から樺太に渡ったとするもある。英雄義経不死、なんとか生きていてほしいという願望から神社や碑をつくった節がある。

義経北行伝説では、義経は蝦夷地へ渡り大陸へ渡ったとされるが、私は蝦夷地には渡らず、三厩の手前三三湊 (とさみなと、青森県北津軽郡市浦村) から船で大陸へ渡ったのではないかと思う。当時はすでに十三湊、秋田土崎をはじめとする日本海沿岸のまちと渤海国との交易が平安時代からあったことが知られているからである。また、義経一行が蝦夷地に向かう以前、藤原基衡の孫、秀元が津軽三郡の領主であったと伝えられていることが挙げられる。十三湊は淡水に海水が流入している汽水湖であった。その後、土砂で水深が浅くなり機能しなくなり秋田氏の支配する秋田土崎湊を拠点とする北前船の時代へと発展していくが、渤海国との交易が平安時代からあったことは広く知られている。 完 写真はいずれも Wikipedia 無料画像より